



会報 たんばうるし

—会報第19号—

2022.1.25

●水色の枠線……切れてはいけない要素（文字やロゴ等）をいれる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★

「ヘッダーフッター」画面（カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック）より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ ページ数は表紙も含めた数になります
- ・ データは1Pごとでも見開きでもご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・ 白紙のページがある場合はコメント欄にご指示ください

—謹賀新年— 明けましておめでとうございます

今まで新年の御挨拶として年賀状を送らせていただいておりますが、今年より会報を新年の御挨拶とさせていただきます。

ご案内が遅れ誠に申し訳ありませんが、何卒ご了承いただきますようよろしくお願い申し上げます。

NPO 法人丹波漆 理事を代表しまして、高橋治子より、新年のご挨拶を申し上げます。

また、1 1月 1 4日に小規模の植栽イベントを開催しました。

京都府・福知山市の事業で取り組んでいただいている学生の皆さまがイベント報告をまとめてくださいましたので、ぜひご覧ください。

年末年始は大雪の年となりました。雪の中、植栽地管理・新植栽事業は続いています。

この後も報告を続けていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。



ご挨拶

平素より皆様には NPO 法人丹波漆にご支援、ご協力を賜り、誠にありがとうございます。

1948 年(昭和 23 年)に衣川光治氏が丹波漆生産組合を立ち上げ、国産漆が衰退する中でも漆掻きの技術を伝え、2012 年(平成 24)にはその弟子である岡本嘉明氏が丹波漆生産組合の流れを汲み、特定非営利活動法人丹波漆として法人化しました。

この間に、多くの皆様に関わって頂き、今日があるのだと思います。この皆様の思いを大切にしながら、未来の人達に継承できるようにと、心を新たにしているところです。歩みは少しずつではありますが、今後も努力していきたいと思っております。

皆様におかれましては、変わらぬご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

NPO 法人丹波漆
理事長 高橋 治子

京都府「学生×地域つながる未来プロジェクト」・福知山市「若者まちづくり未来ラボ事業」

令和 2 年度に引き続き、京都府による「学生×地域つながる未来プロジェクト」に参加しています。令和 2 年度では新型コロナウイルスの影響でオンラインミーティングのみで、NPO 法人丹波漆の活動を京都府内の学生さんに学んでもらい、Twitter で情報発信していただきました。

令和 3 年度は、京都府「学生×地域つながる未来プロジェクト」に加え、福知山市若者まちづくり未来ラボ事業の一環としても学生との活動を行っています。今年度は、NPO 法人丹波漆の活動についてさらに理解を深めてもらうために、京都府内のみ対象の 11 月 14 日に行われた豊かな森の恵み創造事業のお手伝いや漆掻き現場や植栽地を見学していただきました。それをベースに丹波漆を、学生さん自身が手段を考えて情報発信を行います。漆を知らなかった学生さんや地域活動に興味のある学生さんがどの様な視点で丹波漆を情報発信して下さるか楽しみです。次号の会報でお伝えします。



学生×地域つながる未来プロジェクトの概要は www.pref.kyoto.jp/chiikikokyo/gakusei/chiiki.html

●水色の枠線……切れてはいけない要素（文字やロゴ等）をいれる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★

「ヘッダーフッター」画面（カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック）より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ ページ数は表紙も含めた数になります
- ・ データは 1P ごとでも 見開きでも ご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・ 白紙のページがある場合は コメント欄にご指示ください



0. イベント概要

日時：令和3年11月14日（日）9時45分～15時40分

場所：京都府福知山市夜久野町 体験農園（植栽地）および夜久野ふれあいプラザ・研修室

主催：京都府

企画運営：NPO 法人丹波漆

概要：京都府「豊かな森の恵み創造事業」の一環として、イベント「ウルシを植えて里山を考える」（主催：京都府、企画運営：NPO 法人丹波漆）が開催された。イベントは、午前にウルシの定植作業、午後にウルシについての勉強会が実施された。19名の一般参加申込者に加え、京都府・福知山市の行政関係者やNPO 法人丹波漆関係者など、多数の参加があった。今回は新型コロナウイルス感染症対策のため、市内からの参加者を増やし、少人数ながらもウルシを深く知ってもらえる企画内容となった。

1. 午前の部・植栽体験

<当日のスケジュール>

9:45～10:00 集合場所から会場（体験農場）へ徒歩で移動

10:00～10:15 開会挨拶（京都府林業振興課 岩月氏、NPO 法人丹波漆 山内氏）

10:15～10:30 ウルシ定植について（京都府緑化センター主任研究員・樹木医 小川淳氏、NPO 法人丹波漆 山内氏）

10:30～11:40 植栽体験（①ウルシ定植、②ウルシの苗木作り、の二手に別れて実施した。）

11:40～12:00 記念撮影、ウルシ苗木配布



（写真：ウルシについて説明する小川氏）

<概要>

京都府緑化センター主任研究員・樹木医 小川淳氏のお話

京都府緑化センターで林業用種子の研究及び生産をしている。また、樹木医でもある。

ウルシは落葉広葉樹でハゼの仲間であり、また陽樹なので成長の早い樹木である。雄花のあるオスの木と雌花のあるメスの木があるが、見た目では区別はつきにくい。

ウルシは個体を増やすのが少々難しい。ウルシの実の中にある種子の周りにはロウがついている。ロウは水をはじき、硫酸につけてロウを溶かすなど除去するのに非常に手間がかかる。そのため、種子から発芽させてウルシを育てるのは技術的、経済的に困難である。また、挿し木では増やすことが

できない。接ぎ木は多少増やせるが台木を作るのに手間がかかる。

一方、分根は、ウルシの1個体の根の一部から増やす方法で、方法は比較的簡単なので、個体数を増やすのに適していると言える。

●水色の枠線……切れてはいけない要素（文字やロゴ等）をいれる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★

「ヘッダーフッター」画面（カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック）より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ ページ数は表紙も含めた数になります
- ・ データは1Pごとでも見開きでもご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・ 白紙のページがある場合はコメント欄にご指示ください

～質疑応答～

Q.オスメス間でのウルシの取れる量には違いがあるのか。

A.丹波一号は漆がよく取れるものを選択的に生育させていたら、ほとんどの個体がオスであった。オスの方がよく取れる可能性がある。しかし、ウルシ掻きの人々はオスメスを分けて育てる意識はない。

NPO 法人丹波漆 山内氏のお話

胸高直径(地際から130cmの幹の太さ)が15cm以上の個体からウルシを掻くことができる。そこまで成長するのに10～15年かかる、ウルシの生育過程においては、除草が大変である。また、シカの食害や病害虫(アブラムシ、キジラミ)の被害が大きい。これらの被害を受けた個体は樹形が悪くなる。

ウルシは成長とともに樹高が高くなるが、高くなり過ぎると薬剤をまけなくなるため、適度な大きさのウルシをたくさん育てたい。

また、ウルシは水はけの良いところなどの生育に適したところでないと、満身に育たないので、植樹する場所は大切である。丹波漆では、ウルシをとったら切り倒すという殺し掻きをしている。



その後、植栽体験が行われ、①ウルシ定植、②ウルシの苗木作り、の二手に別れて実施した。

①ウルシの定植



(写真左：ウルシ定植の様子)



(写真中央：ウルシを定植する参加者)



(写真右：獣害対策の試みについての解説)

府緑化センターの指導により、ウルシ定植を行った。ウルシ苗場を見学ののち、12本を植栽した。植栽にあたっては、今年度は支柱を設置した。また、府緑化センターにより、試験中の定植方法であるアーバスキュラー菌根菌を利用する定植について、また獣害対策について説明・実演いただいた。

●水色の枠線……切れてはいけない要素(文字やロゴ等)をいれる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★

「ヘッダーフッター」画面(カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック)より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ページ数は表紙も含めた数になります
- ・データは1Pごとでも見開きでもご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・白紙のページがある場合はコメント欄にご指示ください

②ウルシの苗木作り



(写真左：ウルシ苗木を掘り起こしている様子)



(写真中央：分根用に切り取った根)



(写真右：切った根を埋めた畝の様子)

小川氏のご指導のもと、漆の苗木作りを行った。ウルシのかぶれ対策として各自にゴム手袋を配布された。以下、作業の手順である。

(手順)

1. 苗木をスコップで掘り起こした。
2. 苗木の根のうち、直径 1.5cm 程度の根を 20cm の長さに切った。
3. 切った根を 20cm 間隔で苗畑に挿して埋めた。

また、植栽作業後には希望者へのウルシ苗木配布が実施された。



(写真：ウルシ苗木配布の様子)



(写真：参加者での記念撮影)

●水色の枠線……切れてはいけない要素（文字やロゴ等）をいれる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★

「ヘッダーフッター」画面（カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック）より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ ページ数は表紙も含めた数になります
- ・ データは 1P ごとでも 見開きでも ご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・ 白紙のページがある場合は コメント欄にご指示ください

冊子テンプレート
A4 1P (210mm × 297mm)

2. 午後の部・勉強会

<当日のスケジュール>

- 13:30~14:20 ①講演「夜久野の山・里・暮らし」(夜久野町林業研究会会長・安達賢治氏)
および質疑応答・意見交換
- 14:20~14:50 ②講演「遺跡から古文書、文献により丹波漆を考える」(NPO 法人丹波漆・高橋治子氏)
- 14:50~15:10 ③講演「NPO 法人丹波漆のウルシ植栽と夜久野のウルシについて」(NPO 法人丹波漆・山内耕祐氏)
- 15:10~15:40 ④座談会

<概要>

ウルシに関する勉強会として、ウルシや夜久野の山に関わる講師による講演があった。また、参加者らでの座談会も開催され、参加者それぞれのウルシに対する関心や関わりについて話し合われた。会場は夜久野ふれあいプラザ・研修室であり、出席者は32名であった。

①講演「夜久野の山・里・暮らし」
(夜久野町林業研究会会長・安達賢治氏)
および質疑応答・意見交換

(講演要旨)

夜久野町林業研究会は昭和58年に設立し、現在30名ほどの会員が在籍している。山見、農林商工祭への出席(かつては木工教室。近年はパネル展示で夜久野の山の現状や林業補助制度を伝えている)などの活動を行ってきた。

私自身は昭和23年生まれの、72歳。農協に勤務し、営農指導や販売指導を行ってきた。定年後、水稲などの農業をしている。



(写真：勉強会の様子)

夜久野町は山の多い町だ。82%が山林である。うち人工林は6割以上。実家は兼業農家であり、小さいころから家の山作業を手伝ってきた。近所にも農林業関係者が多かった。山に入ると涼しく気持ち良い思い出がある。

定年後、山に入って間伐作業をしてきたが、難しく、怖いと思った。そこで、森林組合に相談へいったところ、森林組合で働きながら山の勉強をすることになり、5年間森林組合で勉強した。森林組合では間伐集材作業などに従事した。そうこうしているうちに、京都府普及センターで4年、農業関係の仕事を務めた。農業は、夏は水稲、秋から冬はシイタケを栽培している。4トン車で間伐材を出荷している。

かつての夜久野の山の姿は、水田の奥に山、人工林、奥に広葉樹林、といった様子だった。カシ、ナラ、クヌギは薪や木炭にして活用していた。スギやヒノキは山の高いところに植わっていた。木材は川やトラックで出荷していた。当時は木材価格が良く、息子を大学へやったり娘の嫁入り道具を山の利益で買えた。当時の植林政策もあり、里山は草刈りされきれいに管理され、子供たちの遊び場になっていた記憶がある。昭和40年代後半より、コメ余りに伴う減反政策がはじまった。薪や木炭が、ガスや灯油に置き換わり、広葉樹林も植林が進むようになった。それでも当時は木材価格が良かったので、管理が行き届いていた。

●水色の枠線……切れてはいけない要素(文字やロゴ等)をいれる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★

「ヘッダーフッター」画面(カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック)より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ ページ数は表紙も含めた数になります
- ・ データは1Pごとでも見開きでもご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・ 白紙のページがある場合はコメント欄にご指示ください

冊子テンプレート

A4 1P (210mm × 297mm)

ここ数十年で山は大きく変化しました。昭和 50 年ごろまでは製材所が町内に 7 か所ほどあったが、現在は一か所が細々と稼働するのみである。今では山の仕事で山へ入る人もほとんどなく、手入れが行き届いていない状況だ。暗い山になってしまった。自分の山の境界を知らない人も増えてきている。私の集落では、自治会の中で話し合いをし、森林組合から借りた台帳等をもとに所有者の範囲を確かめる作業を行った。今では持ち主や境界がわかるようになった。また私の集落では、山を売るときには、地域内で連絡し合う、地域として山の維持がしていけるように話し合っている。

夜久野の山は、木材価格の低迷や過疎高齢化、山の手入れ不足や境界問題といった課題に直面している。現状は、戦後植栽された山の手入れができていない状況である。近年の土砂災害への影響も深刻である。地球温暖化の影響で暖冬となり、シカの食害が増えている。植林をしても新芽を食われてしまう。広葉樹の萌芽した芽をシカが食べてしまう。そのため、はげ山が近年増えている。シカは水田や畑作にも被害を与えている。シカ害は、人が頻繁に山に入らなくなったのも原因だと感じる。人は、お金になるとすると、地形等気にせず、頂上から里山まで植林する。お金にならないと、手入れもせず放っておく。私は山が泣いていると思う。

今後、夜久野の山林はどのようにしていくべきか。まず、間伐をして大径木にしていくべきである。また、杉やヒノキばかりでなく広葉樹も植えていくべき。そして、循環型の林業を行うことが大切だ。伐採、植林、生育のサイクルをきちんと回していけるよう考えていく必要がある。かつて夜久野には造林組合があり、集落の垣根を超えて活動していた。このような組織を復活させていきたい。現状、農区長に山のこともさせているが、農区長ごとに山に対する温度差が異なる。造林組合のような、森林を所管する専用の組織があった方がよい。

また、林業をしたい若い人たちが働ける環境作りが重要である。山で働くことが収入になるような仕組みづくりが必要だ。

さらに、自治会との連携の中で、府や市の補助事業をうまく活用していく必要もある。補助事業を多くの人に知ってもらうために、自治会と連携して、補助事業の説明会を開くなどしていく必要がある。ある集落から、「昔はうちの集落でもウルシをたくさん植えていた」という声を聞いたことがある。今後、ほかの特用林産物と同じように、適地にはウルシを植えることが地域で普及していけば良いと思う。ウルシを通じて、多くの人に山に関心をもってほしい。

(質疑応答・意見交換)

・ご自身の森林との関わり、山林の数十年にわたる変化と農業や住民の暮らしへの影響、山に人の手が入らなくなったことによる問題提起と対応策についてお話しいただいた。

山の変化は、漆かきにも影響を与えていると感じる。

・戦後、植林ブームがあったが、夜久野では、そのブームあったか？

— あった。戦後、減反政策で田んぼが奥から植林地になった。(安達)

・当時はウルシ以外の樹木の利用はどのようであったか？

— カシやナラが燃料として利用されていた。マツはあまりなかった。

・かつては農産物も木材も、消費者へ直接売っていた。丹波漆も消費者と直接つながる方法に可能性があるのではないか。



●水色の枠線……切れてはいけない要素(文字やロゴ等)をいれる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★

「ヘッダーフッター」画面(カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック)より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ページ数は表紙も含めた数になります
- ・データは 1P ごとでも 見開きでも ご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・白紙のページがある場合は コメント欄にご指示ください

冊子テンプレート
A4 1P (210mm × 297mm)

②講演「遺跡から古文書、文献により丹波漆を考える」

(NPO 法人丹波漆・高橋治子氏)



(講演要旨)

福井県鳥浜遺跡から、縄文時代のウルシ製品が出土している。日本人は縄文初期の7000～5500年前からウルシを使っていた。福知山でも、ウルシが付着した焼き物や、弓の部である膜が出土しており、夜久野町化石・郷土資料館に展示している。国内では、ウルシをかいた木が出土しており、関西外国語大学教授の鶴島三壽氏の書籍によると、今後京都府内からもウルシが出土してもおかしくないという。

寛文9年 江戸時代・福知山藩の時代に、夜久野ではウルシを年貢として納めていたことが記録からわかる。このことから、江戸時代にはすでに夜久野の周辺でウルシを植え液を採取していたことがわかる。明治16年の生漆販売の判取帳が残っている。帳簿に見られるウルシ問屋は現在も京都市内にあるものもある。現在、京都でウルシ問屋は四軒ほど残っている。明治28年に京都市内の岡崎公園で開催された第四回内国勸業博覧会ではウルシ液が展示されていた。

博覧会で三等賞をとった賞状が町内の民家に残っている。明治40年「実用漆工術」では、漆の産地として一番はじめに「丹波」があげられている。夜久野・由良川周辺の漆は丹波漆として重宝されていた。

現在国内で使用される漆のほとんどが外国産だが、漆の輸入がはじまったのは明治からであった。昭和の農林省による農林振興政策の一環で、漆増産実行組合設立奨励金やウルシ増産奨励金があった。このとき、下夜久野で組合が設立されたことが記録されている。

昭和9年「山のさち」には、丹波漆の苗が広告されており、当時苗が2万本も生産されたと書かれている。実際は2万本も植えていないにしても、戦前は、7500本や3000本は確実に植わっている記録が残っている。しかし、第二次世界大戦によって増産計画はうまくいかなく、ウルシの本数が減ることとなる。このため、戦後ウルシ掻きさんは激減した。国内でのウルシの需要激減もあり、安い中国産ウルシが台頭することとなった。戦後、衣川光治さんも親から漆掻きを継承したが、儲からないので布団屋さんになった。

福井などもウルシがさかんな地域であったが、なぜ夜久野のウルシが現代にまで残ったのか。それは衣川光治さんの努力によるものである。衣川光治さんは昭和63年に「丹波漆 漆の掻き方」という冊子を発行した。この冊子は「やくの木と漆の館」などにある。冊子発行時には、丹波漆の継承と発展のために地域内に協力者を呼びかけた。

そこで集まった一人が、NPO 法人丹波漆前理事長である岡本さんである。丹波漆の第一人者は衣川光治さんであり、中興の祖が岡本さんである。

岡本さんは、ウルシの植栽やNPO 法人活動を積極的に行ってきた。このような、人のつながりでほそぼそとウルシが残ってきた。

デービット・アトキンソンが、「日本の伝統・文化を支える素材が輸入品で良いのか」と問題提起し、文化庁も文化財修復には国産ウルシを使用する方針を打ち出した。しかし、国産ウルシの生産は年々減少傾向である。漆の価値をいかに発信し、守っていくか。こういったことに敏感なのは、若い世代だと思っている。今日は学生もイベントの手伝いで来ている。若い世代の意見ももらいながら、今後の取り組みを行っていきたい。

●水色の枠線……切れてはいけない要素（文字やロゴ等）をいれる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★

「ヘッダーフッター」画面（カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック）より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ ページ数は表紙も含めた数になります
- ・ データは1Pごとでも 見開きでも ご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・ 白紙のページがある場合は コメント欄にご指示ください

③講演「NPO 法人丹波漆のウルシ植栽と
夜久野のウルシについて」
(NPO 法人丹波漆・山内耕祐氏)



(講演要旨)

NPO 法人丹波漆では、19 箇所、合計面積 3.2ha のウルシ植栽を行ってきた。新植後年数は 15~0 年である。累計植栽本数は 1760 本であるが、うち現存するのは約 1300 本である。つまり、多くのウルシは植栽うまくいかなかった現状がある。

水田跡地は漆生育に適していない傾向があり、枯死木が多かった。水田跡地では 4~5 年くらいで成長が止まりそれ以降大きくなることが多かった。これは土壤の過湿が原因と思われる。水田跡地だが漆掻きできた例もあり、それはのり面際のところである。また、水田跡地ではない場所でも地形的に過湿になるところは枯れやすい。

過湿以外にも、ウルシが枯れる原因がある。たとえば、くり林ではウルシへの病害が発生した。また黒ぼく土壌の植栽地における風倒・病害事例もあり、黒ぼく土に植えたからといってうまくいくとも限らない。

これらの経験から、水田跡地や湿地、地形的に過湿な場所、表土 (A 層) が浅い地点、といった場所はウルシ植栽がうまくいきにくいことがわかってきた。

NPO 法人丹波漆によるウルシ植栽事業が抱える課題としては、植栽する土地の選定がある。ウルシの適地を見極めることはもちろん、除草・獣害防止等の管理における作業性を考慮した選択を行う必要もある。また、気象害や病害への耐性の高い植栽・苗木生産方法を確立することも課題である。

自生ウルシの存在にも注目している。すでに 110 本の自生を確認しており、上夜久野駅のホームの向かい側など、身近なところにも意外にも自生している。自生ウルシ 110 本のうち 109 本は、山裾の林縁部 (農地・道路・河川との境界) から 20m~30m 以内に生えている。これは、陽樹であり先駆樹種であるというウルシの生態を反映しており、また特用林産物として植栽してきたという人為的な影響もあると考えられる。

今後の丹波漆継承・発展の方向性としては、省力的な土地利用の方法としてのウルシの更なる活用があるのではないかと考えている。ウルシの管理・生産に最低限必要なのは除草と獣害予防柵の維持のみであり、管理・生産にかかる労力がほかの農作物より少ないことが優れている。耕作放棄地や、除草するだけののり面などに、ウルシが適するのではないか。また、山裾を構成する樹種のひとつとしてウルシの更なる可能性があるのではないか。ウルシは樹高 10m ほどで収益化でき、更新可能な木である。また、山裾において針葉樹より防災的な機能を期待できる。

さらに、漆かきを目的とした維持管理を誘導できる。

④座談会

- ・移住者であり、夜久野町水坂在住。山に道を作っている。里山で持続的な林業経営を目指している。
- ・南丹市美山町へ移住してきた。漆の漆器をつくる作家をしている。去年庭に漆の木を植樹した。
- ・夜久野在住。コミュニティセンターに勤務。公民館長を務めている。山にたけのこをとりにいくと、NPO 法人丹波漆理事長である高橋氏の頑張っている姿をみかけ、興味をもって今回参加することにした。

●水色の枠線……切れてはいけない要素 (文字やロゴ等) を入れる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★

「ヘッダーフッター」画面 (カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック) より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ページ数は表紙も含めた数になります
- ・データは 1P ごとでも 見開きでも ご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・白紙のページがある場合は コメント欄にご指示ください

冊子テンプレート

A4 1P (210mm × 297mm)

- ・夜久野町在住。農家をしている。近年のシカ害は深刻である。行政は狩猟期間しか狩猟してはいけないというが、年間通しで狩猟すべき。農家は困っている。防護柵は設置や管理に労力がかかる。行政にはシカの駆除について一から考えてもらいたい。
- ・国宝の補修で外国産の漆が使用されているのをテレビで見た。姫路に住んでいたが、ウルシを植えることを生涯をかけてやりたいと思い、去年夜久野町に移住した。今後ウルシをたくさん植えていきたい。
- ・夜久野町水上在住。個人で漆を管理しており、150本植えた。NPO法人丹波漆の力も借りた。生育したらNPO法人丹波漆で買ってもらうという覚書も締結済みである。栽培管理のマニュアルを確立し、個人でもウルシを育てやすくなるようお願いしたい。
- ・研究者。丹波1号のゲノムを読んでいる。シカ防護柵や草刈りのコスト、苗木生育方法などについて知りたい。
- ・妻に同伴して来た。ウルシの獣害について知りたい。
→(山内)枯死事例や、生育が遅れた事例がある。
- ・京野菜を作り、オーストリアから亀岡へ夫婦で移住してきた。妻は紙や染物に、夫はウルシに興味がある。オーストリアにウルシを植えたい。
- ・大学生。ウルシを研究テーマにしており、夜久野のウルシを調査用に購入した。漆を顕微鏡で観察するなどしている。研究成果は丹波漆関係者に共有するつもり。
- ・夜久野町在住。田舎の衰退対策や、間伐の活性化を望む。丹波漆の活動にも役立ちたい。
- ・京都市産業技術研究所に所属している。陶磁器・漆器のデザイナーをしている。ウルシの自給率低下を知って、ウルシ生産に関心をもった。10年という短いサイクルで収益になることを生かして何かできないか。
- ・豊岡市但東町在住。漆の苗木がもらえるということで、興味をもち参加した。
- ・森の京都DMOの文化観光サポーターをしている。森の京都DMOとしても、丹波漆を積極的に発信していきたい。
- ・綾部の森林組合の作業班をしている。漆かきでお世話になっている。自然を相手にするには謙虚な姿勢が必要であると考えている。
- ・大学生。森林を専攻する。ウルシに興味をもち参加。今後、京都府・福知山市事業として、学生チームで丹波漆の発信活動を行っていく。
- ・大学生。地域づくりを専攻。木を専門としていない自分にとっても、ウルシにはさまざまな側面があり興味深く、ウルシには可能性があると思う。

(講評・NPO法人丹波漆 山内氏より)

ウルシに関心をもって関わってくれる人がたくさん来てくれるのは、大変ありがたいことである。NPO法人丹波漆としても、ご要望があればぜひお力になりたい。漆を文化財に使う、という従来の用途・役割以外にも、ウルシにはいろいろな人にとってさまざまな価値をもちうるものではないか。多様な価値・意義が漆掻きの振興にもつながる。また、ウルシをツールの一つとして、地域振興にも活かしていきたい。

●水色の枠線……切れてはいけない要素(文字やロゴ等)をいれる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★PDFに変換して入稿される場合★★★

「ヘッダーフッター」画面(カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック)より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ページ数は表紙も含めた数になります
- ・データは1Pごとでも見開きでもご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・白紙のページがある場合はコメント欄にご指示ください

雪の植栽地

年末から大雪となり、1月中は近年になく、よく雪が降る年明けとなりました。

ウルシに被害はなかったものの、雪のため、獣害防除フェンスが倒れている箇所がありました。

現在は応急的に刈網を設置している状況で、フェンス修理は、雪のためなかなか思うように作業がはかどりません。残雪が少なくなったらすぐに作業にかかりたいと思います。



会員の皆様へ

当法人が10年目を迎えられるのも、会員の皆様の継続的なご協力のおかげです。皆様にとってより協力しやすい団体を目指し、より良い活動内容となるべく、アンケートを行いたいと思います。アンケートのご連絡を後日お送りしますので、ぜひ、お答えください！！ よろしくお願いたします！

- 水色の枠線……切れてはいけない要素（文字やロゴ等）をいれる範囲
- ピンクの枠線…仕上がりのサイズ
- みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★
「ヘッダーフッター」画面（カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック）より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ ページ数は表紙も含めた数になります
- ・ データは1Pごとでも見開きでもご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・ 白紙のページがある場合はコメント欄にご指示ください



写真：冬のあいだ、仮植えされて植栽を待つウルシ苗

NPO 法人丹波漆は、年間 100 本の植栽と、漆掻きの後継者の育成を目標に活動しています。

その運営には、皆さまのご支援・ご協力がなければ成り立ちません。

みなさまのあたたかいご支援をお待ちしています。

賛助会員（団体）…30,000 円

賛助会員（個人）…10,000 円

サポーター会員… 3,000 円（各一口）

お振込み先：

ゆうちょ銀行 振込専用口座 00920-0-209552

ゆうちょ口座間 記号 14430 番号 3724651

トクビ) タンバウルシ

※ HP からも、クレジット払いで入金していただけるようになりました！

NPO 法人丹波漆 HP : tanbaurushi.org

会報たんばうるし 会報第 19 号

発行 NPO 法人丹波漆

〒629-1321

福知山市夜久野町直見 2452

tel: 090-8972-5062 (高橋)

fax: 0773-38-0425(事務局)

e-mail: info@tanbaurushi.org



2022.1.25

※ 事務所の住所が変更になりました

●水色の枠線……切れてはいけない要素（文字やロゴ等）をいれる範囲

●ピンクの枠線…仕上がりのサイズ

●みどりの枠線…フチなし印刷にする場合、背景を伸ばす範囲

★★★ PDFに変換して入稿される場合 ★★★

「ヘッダーフッター」画面（カーソルが矢印になる上下の余白の範囲でダブルクリック）より色つきのガイド線を消してから変換してください

冊子のデータ製作について

- ・ ページ数は表紙も含めた数になります
- ・ データは 1P ごとでも 見開きでも ご入稿頂けます
※見開きの場合はページ順どおりにご作成ください
- ・ 白紙のページがある場合は コメント欄にご指示ください